

今後の運動部活動の在り方について

担当 有働 秀樹

1. はじめに

ここ数年、新型コロナウイルス感染症により、部活動はもちろん、学校生活においても従来通りの活動ができていない。しかし、部活動ができない状況の中は、改めて部活動を行うメリット・デメリットが見直される機会ともなっている。今回の研究では、スポーツ庁が出している「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」から、部活の今後の在り方について考えてみる。

2. 運動部活動の意義

学校の運動部活動は、スポーツに興味・関心のある同好の生徒が参加し、各運動部の責任者の指導の下、学校教育の一環として行われ、日本のスポーツ振興を大きく支えてきた。また、体力や技能の向上を図る目的以外にも、異年齢との交流の中で、生徒同士や生徒と教師等との好ましい人間関係の構築を図ったり、学習意欲の向上や自己肯定感、責任感、連帯感を涵養したりする等、生徒の多様な学びの場として、大きな教育的意義をもっているものである。

3. 運動部活動の課題

現代では、社会・経済の変化等により、教育等に関わる課題が複雑化・多様化し、学校や教師だけでは解決することができない課題が増えている。特に、少子化が進展する中、運動部活動においては、従前と同様の運営体制では維持は難しくなっており、学校や地域によっては存続の危機にある。将来においても、全国の生徒が生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育む基盤として、運動部活動を持続可能なものとするためには、抜本的な改革に取り組む必要がある。

4. 合理的かつ効果的で・効率的な取組

運動部活動を合理的かつ効果的で・効率的に行うためには、適切な指導を実施しなければならない。具体的には、運動部顧問は、スポーツ医・科学の見地からは、トレーニング効果を得るために休養を適切に取る必要があることや、過度の練習がスポーツ障害・外傷のリスクを高め、必ずしも体力・運動能力の向上につながらないこと等を正しく理解する。さらに、生徒の体力の向上や、生涯を通じてスポーツに親しむ基礎を培うことができるよう、生徒とコミュニケーションを十分に図り、生徒がバーンアウトすることなく、技能や記録の向上等それぞれの目標を達成できるよう、競技種目の特性等を踏まえた科学的トレーニングの積極的な導入等により、短時間で効果が得られる指導を行う。また、専門的知見を有する保健体育担当の教師や養護教諭等と連携・協力し、発達の個人差や女子の成長期における体と心の状態等に関する正しい知識を得た上で指導を行うことが必要とされる。

5. 生徒のニーズを踏まえた環境の整備

「全国体力、運動能力、運動習慣調査」によると、生徒の1週間の総運動時間が男女ともに二極化の状況にあり、特に、中学生女子の約2割が60分未満であること。また、生徒の運動・スポーツに関するニーズは、競技力の向上以外にも、友達と楽しめる、適度な頻度で行える等多様である。このようなことから、現在の運動部活動が、女子や障害のある生徒等も含めて生徒の潜在的なスポーツニーズに必ずしも応えられていないことを踏まえ、生徒の多様なニーズに応じた活動を行うことができる運動部を設置することが必要となる。

6. おわりに

今回は、スポーツ庁の「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」から、部活動の今後の在り方について考えてみたが、現在では少子化や教員の働き方改革を踏まえ、従来の学校単位での活動から一定規模の地域単位での活動も視野に入れた体制の構築が進められているので、今後もそのことについても研究をしていきたいと考える。